

稲作到来

～弥生人つくった とった たべた～

開催場所：国立大学法人山口大学 埋蔵文化財資料館

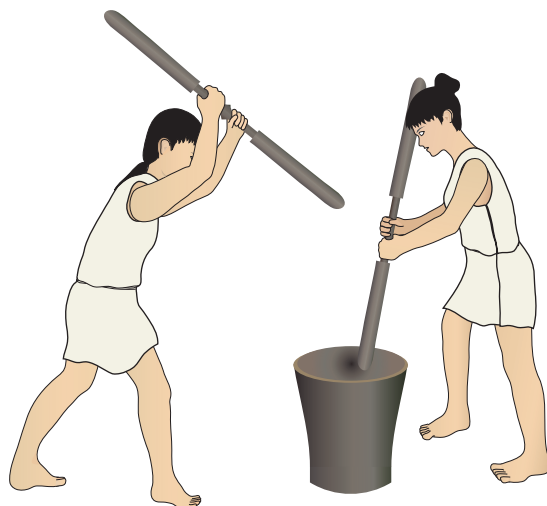
開催期間：平成 19 年 4 月 2 日 (月) ～平成 19 年 6 月 1 日 (金)

開館時間：午前 9 時～午後 5 時

休館日：土・日曜日、祝祭日

※休館日に入館ご希望の方は、事前にご連絡ください
(団体のお客様に限ります)

入館料：無料

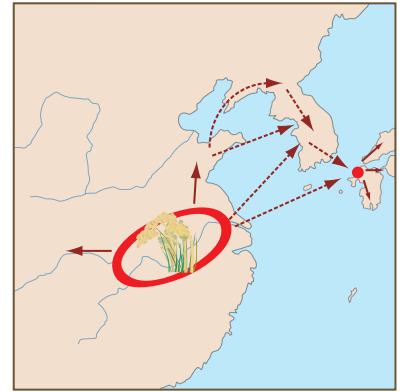


弥生時代～農耕文化の成立～

縄文時代の生活では、食文化においても自然環境に大きく依存していました。ところが、今からおよそ2500年前、大陸から革新的な食物の生産方法がもたらされます。「稲作」の到来です。イネの起源に関しては、インド北東部やヒマラヤ山脈南麓など現在でも諸説ありますが、日本列島に伝来した「水田稲作」の起源地は中国大陸の長江下流域と考えられています。長江下流域で成立・発展した水田稲作(米)は、安定した収穫量が得られることや、保存に極めて適した食料であることなどから、アジアの各地に伝播していきました。

それでは、日本列島へはどのようなルートで伝播したのでしょうか？ 列島で最も早く稲作がもたらされたのが九州北部地域であることは確実視されています。その地域で発見される初期の水田遺跡では、朝鮮半島との強い関係が見られる石器や土器が出土していることから、有力なルートとして朝鮮半島経由の伝播が考えられています。しかしながら一方では長江下流域からの直接伝播説があるなど、様々な見解が示されているのが現状と言えます。

いずれにせよ、九州北部にもたらされた水田稲作の技術は、極めて短期間に北海道や沖縄諸島などをのぞく列島全域に伝播していきました。弥生時代の始まりです。



稲作の伝播

吉田遺跡(山口大学構内遺跡)の弥生時代

山口県山口市に所在する山口大学吉田キャンパスは、その全域が吉田遺跡の中に位置しています。吉田遺跡は、旧石器から江戸時代におよぶ全時代の埋蔵文化財を包蔵しており、県内でも屈指の複合遺跡として知られています。ここでは、弥生時代の吉田遺跡について紹介します。弥生時代になると、吉田遺跡では集落が営まれていたことが確認されています。これまでの調査により、集落は弥生時代を通じて存在し続けることが明らかとなっており、時期により集落の構成が変化するように見えます。各時期ごとの集落の変遷を見てみましょう。

弥生時代前期

弥生時代前期の中頃に、まず吉田キャンパス南西部のグラウンド周辺に集落が営まれるようです。陸上競技場北西側の公共下水接続調査区では、2本の自然河川にはさまれた微高地上に、溝や土壇、柱穴が多数発見されました。溝の中には円く回っているものもあり、おそらく竪穴住居に伴う排水溝ではないかと推定されています。前期の後半から終わりにかけての時期のものとしては、野球場の南東部調査区で竪穴住居跡などの遺構が確認されています。またキャンパス北部の大学会館前庭部では貯蔵穴が発見されています。どうやら、前期の中頃から後半にかけて、集落は移動・拡大していくようです。

弥生時代中期

弥生時代中期に至ると、集落は遺跡保存公園から教育学部校舎周辺に営まれるようになります。遺跡保存公園では、中期前半の竪穴住居跡が3棟、中期中頃～後半のものが6棟、中期と推定されるものが5棟確認されています。また、遺跡保存公園調査区の北西側に位置するラグビー場防球ネット調査区では、幅約5.5m、深さ1.1mの大きな溝が発見されています。この溝の中からは、弥生時代中期後半から後期初頭にかけての土器などが出土しています。この溝は遺跡保存公園に営まれた集落を取り囲む「環濠」の一部である可能性が考えられます。

この他に、キャンパス北部、大学会館前庭部南側のキャンパス循環道では、中期後半の土器が多量に発見されています。土器の中には、主に九州北部で出土する「須玖式土器」系のものが存在しており、研究上大変重要な資料となっています。

弥生時代後期

弥生時代後期も、中期に引き続き同じ場所に集落が営まれます。遺跡保存公園から教育学部校舎にかけての地域では、推定を含めると計14棟の竪穴住居跡が確認されています。この内遺跡保存公園では、火災にあって消失したと推定される方形竪穴住居跡が発見されました。住居跡の床面には、焼け落ちた桁や垂木などの建築部材が木組みのまま落下した状態で残っていました。この住居跡は、当時の建物の上部構造を知る上で貴重な資料となっています。

また、キャンパス北部の大学会館前庭部でも竪穴住居跡が1棟確認されています。周辺地である本部2号館調査区の土壇や本部1号館の溝から、後期後半の土器が多数発見されていることなどから、この地域にもある程度の規模の集落が営まれていたものと推定されます。

吉田遺跡では未だ弥生時代の水田跡は発見されていませんが、農耕具である石庖丁や石鎌などはキャンパス各地から発見されており、この地で稲作農耕がおこなわれていたことは間違いないと言えます。



山口県の弥生遺跡2 宮ヶ久保遺跡

環濠集落の発見

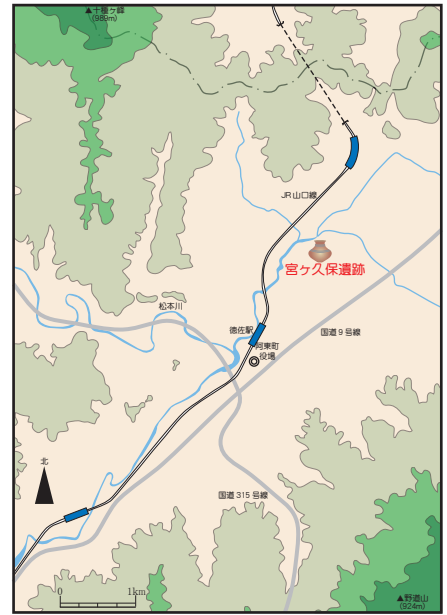
宮ヶ久保遺跡は、中国山地の山間部に形成された徳佐盆地内に位置します。遺跡地は古くから水田耕作の際に土器や石器が採集されることで知られていました。

昭和51年(1976)、圃場整備事業に伴う発掘調査がおこなわれ、この地に弥生時代中期中頃から後期にかけて集落が営まれていたことが判明しました。

調査地は隣接する河川の河道の変化や氾濫により激しく浸食されていますが、微高地部分に形成された遺構は幸運にも良好な状態で保存されていました。発掘調査により確認された遺構は、竪穴住居跡が7棟、掘立柱建物跡が4棟、溝が5条などです。この内、溝4条は集落を取り囲む環濠と推測されます。このような集落を「環濠集落」と呼びますが、これは弥生時代に特徴的に見られる集落形態であり、集落の周りに巡らされた溝は外敵の侵入を防ぐための防衛施設と推測されています。

よみがえる木の文化

宮ヶ久保遺跡の調査で最も注目を集めた成果は、環濠内からおびただしい数の木製品が出土したことです。通常、木製品は土中に埋まっている間に腐食・分解して土になってしまいますが、調査地は湧水点が高く、深く掘り込まれた溝の内部は常に水気を帯びた状態であったことが幸いしたようです。出土した木製品は、鋤や鍬などの農具の他に、斧の柄や弓、鉢や皿、杓子などの容器類、紡錘車や布巻具などの紡織具、さらに剣や戈、猪や鳥などを模った祭祀具など多種にわたります。この発見により、土器や石器だけでは理解することが出来ない弥生人の日常生活を、より具体的に復元することが可能となったのです。



宮ヶ久保遺跡全景



多量の木製品が出土した環濠



山口県の弥生遺跡3 下村遺跡

山口県弥生集落の最新情報

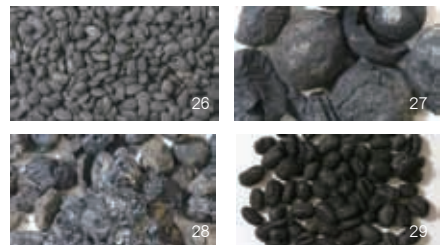
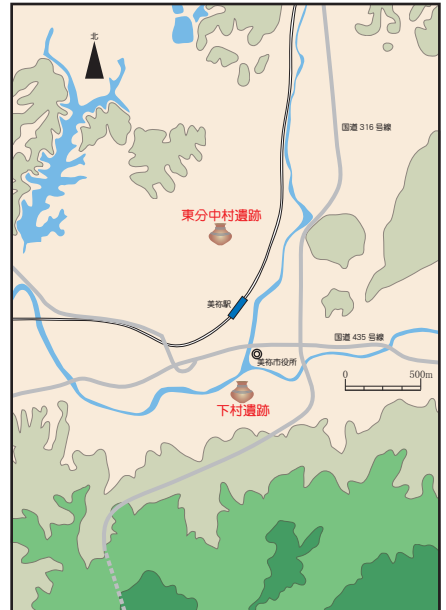
下村遺跡は、現在の美祿市街近くに営まれた弥生時代の集落遺跡です。遺跡は標高約90mの独立丘陵上に立地しています。平成18年5月から11月にかけて、約4000㎡を対象に発掘調査がおこなわれました。

調査の結果、竪穴住居跡6棟、貯蔵穴50基、土墳墓1基、土壙が約120基確認されました。

各遺構から出土した遺物はほぼ弥生時代中期初頭のものに限定されており、この集落が短期間しか存続しなかったことがわかります。近辺に目を向けると、北方約1.5km地点には東分中村遺跡が位置しています。この遺跡からも竪穴住居跡や貯蔵穴が発見されており、その時期も弥生時代前期末から中期初頭であることから下村遺跡との関連性が注目されます。

稲作の証拠…炭化米発見！

下村遺跡の発掘調査で最も注目される成果は、貯蔵穴や土壙の中から米をはじめとする多くの穀物類が出土していることです。特に8号貯蔵穴の中からは、多量の炭化米をはじめ、数種の炭化穀物が出土しています。炭化物の総量は約50kgあり、弥生時代の穀物類としては県内でも稀な出土状況と言えます。穀物の種類としては米（粳の状態）、大豆、小豆、クリの4種が確認されています。また他の遺構からヒエの出土も確認されており、弥生人が米以外に何を食べていたかを知る上で重要な資料となります。



山口県の弥生遺跡4 北迫遺跡

貝塚をもつ弥生集落

北迫遺跡は宇部市街の北方約5kmに位置し、標高約83mの丘陵先端部に営まれた弥生時代中期から終末期にかけての集落遺跡です。所在地の地名（字名）が「蠣塚」であることから、地下に貝が埋まっていることは古くから認識されていたようです。

考古学的には、大正14年（1925）に2ヶ所の貝塚が発見されたという記録が残っています。その後、昭和37年（1962）に宇部市制40周年記念事業の一環として北迫遺跡の発掘調査がおこなわれました。調査の結果、弥生時代中期の円形竪穴住居跡2棟、弥生時代終末期の方形竪穴住居跡2棟が確認されました。また、住居跡の北西約80mの丘陵斜面に弥生時代中期に形成された貝塚が存在することが判明しました。遺跡は昭和48年（1973）年に宇部市の指定史跡となり、現在までに14棟前後の竪穴住居跡と2ヶ所の貝塚が確認されています。

なぜ丘陵部に貝塚が？

地図を見てもわかるように、北迫遺跡は現在の海岸線から遠く離れた丘陵地に位置しています。しかしながら、弥生時代には遺跡の南方に広がる標高約5～10mの沖積平野部までは海が入り込んでいたものと推定されています。実際に、山口大学小串キャンパスのある山口大学医学部構内遺跡では、地下の海成砂土中から多量の貝類と伴に縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器などが発見されており、少なくとも古墳時代まではこの地が海中であったことを物語っています。北迫遺跡に暮らした弥生人は、目の前に広がる海岸部で容易に貝をとることができたのでしょう。



参考出展 大阪府茨木市東奈良遺跡

遺跡の位置と環境

東奈良遺跡は、大阪府の東北部にあたる茨木市に位置します。茨木市は、淀川の右岸、丹波高原の一部をなしている老の坂山地の麓に広がる三島平野の一角を市域としています。

市内平野部には遺跡が密集して存在しており、古くから生活しやすい自然環境であったことがわかります。また、京都から九州太宰府を結ぶ古代の山陽道（江戸時代には西国街道と呼ばれます）が市の中心部を東西に横切っており、交通の要所として発展した地域でもあります。

遺跡の発見

茨木市南部の低湿地に位置する東奈良遺跡が初めて発見されたのは、昭和45年（1970）から昭和47年（1972）にかけておこなわれた遺跡のほぼ中央を南北に流れる小川水路の改修工事の時のことです。昭和46年（1973）、工事が東奈良2丁目でおこなわれた時、掘り上げられた土砂の中から多量の弥生土器が発見されました。このことから、工事地周辺の地下に弥生時代の遺跡が眠っていることが判明し、その地名から「東奈良遺跡」と名付けられたのです。

おりしも、昭和45年（1970）に隣する吹田市千里丘陵で開催された日本万国博覧会（大阪万博）を契機に、遺跡地周辺は急激に土地開発が進められ、東奈良遺跡も長期にわたる発掘調査が必要となりました。

その後の調査により、東奈良遺跡が弥生時代前期から終末期まで営まれ続ける巨大な環濠集落であること、集落外に基域（方形周溝墓群）が形成されていることなどが判明しました。

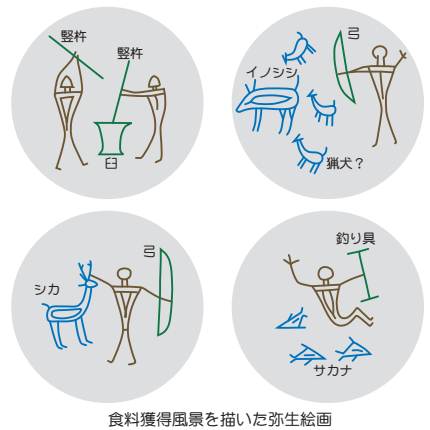
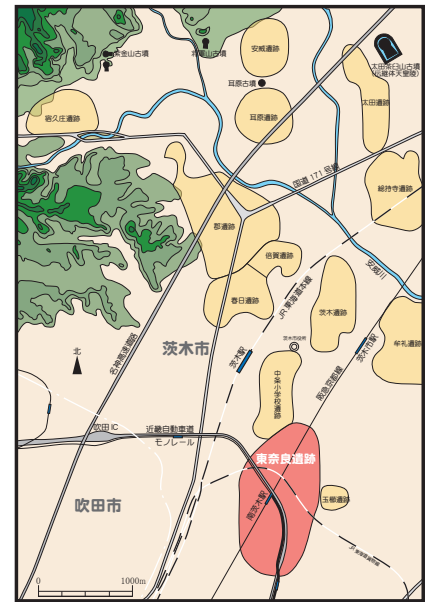
特に、昭和48年（1973）から昭和49年（1974）にかけておこなわれた調査では、石製の銅鐸鑄型やガラス勾玉の土製鑄型（いずれも国の重要文化財指定）と伴に、籐の羽口など鑄造に関わる遺物が多量に出土し、遺跡の性格を考える上で非常に重要な資料が得られました。

また、平成10年（1999）から平成12年（2001）にかけておこなわれた調査では、弥生時代中期後半の環濠内から銅製の舌（銅鐸の内部につるして音を奏でる棒）を伴う小銅鐸が出土し、注目を集めました。

豊かな食文化

東奈良遺跡は低湿地帯に営まれた集落であるため、地下深く掘り込まれた環濠に捨てられた木製品（鋤や鋤、杵や臼などの農具や食器類）や動物遺体（カキやハマグリをはじめする貝類、シカやイノシシなどの動物の骨・角など）などが形を失わずに残っています。これまでに発見されているこれらの遺物を見ると、銅鐸などに描かれた弥生絵画の世界がより現実的なものとして目の前に浮かんできませんか？

稲作農耕の開始と同時に、食糧確保のための道具も大きく変化しました。東奈良遺跡の出土品は、弥生人の食生活を復元する上で大きな役割を果たしています。



食料獲得風景を描いた弥生絵画



43



44



45



46



47・48



49・50



51



52

53



54



55

56

古代人の知恵に挑戦！～古代のお米をつくってみよう～

平成 18 年（2006）春、山口大学埋蔵文化財資料館は壮大な取り組みに挑戦することになりました。その取り組みとは、現代社会において弥生時代の稲作農耕を復元しよう！というものです。実験場所は教育学部実習農場、さらに教育学部の教職員の方々に稲作の基礎を指導していただくことになりました。さらにどうせ実験するのならば市民参加型の学習の場としてしよう！ということで、埋蔵文化財資料館と教育学部の共催による公開授業「古代人の知恵に挑戦！～古代のお米をつくってみよう～」の開催が決定されました。ここでは、その実験の過程と成果を紹介します。さて、実験の運命や如何に…。

お米選び

まず、どのようなお米をつくるかを決定しなくてはなりません。現在のお米は、日本列島に稲作がもたらされて以降、長年にわたる品種改良がなされています。現在のお米を用いれば、台風などの強風にも強く、収穫量も多く見込めるのですが、それでは弥生時代の稲作の復元にはなりません。そこで、現在のお米のルーツと推定されている赤米を育てることにしました。

赤米とは？

赤米とは、稲の原種と考えられる野生稲の特徴を受け継いでいる赤いお米のことです。「お米が赤い？」と疑問に感じる方もいるかもしれませんが、これはお米の糖層にポリフェノール的一种であるカテコールタンニン（略称：カテキン）という赤い色素が含まれているためです。奈良時代から江戸時代まで、多くの文献に「赤米」の記事が見られ、長期間つくられていたお米と言えます。ところが明治時代に入ると赤米は雑草と見なされ駆除運動が活発となり、列島内で目にすることが少なくなってしまいました。

しかしながら、現在でも長崎県の対馬や鹿児島県の種子島、岡山県の総社市などで神様への奉納米として生産されています。このことから、今でもおめでたい席やお祝いの席で食べられている「お赤飯」のルーツは赤米ではないかと考えられています。

田植えに挑戦！

5月27日（土）、いよいよ田植えの日をむかえました。ところが…この日はあいにくの雨模様。せっかく貫頭衣を着ていただいたのですが、やはり健康が一番です。雨合羽を着ての田植えとなりました。水田の面積は約53㎡と小規模なものです。みんなで一列に並び、心を込めて植えました。すくすく育て古代米！！



苗を束ね、細いワラ縄でくくります



雨の中、田植えに挑戦

1ヶ月がたちました

雨の中の田植えから1ヶ月がたちました。古代米は元気に生長しているのでしょうか？

6月24日（土）、第2回目の公開授業を開催しました。まず、参加者全員で古代米の生長の確認です。田植え時に長さ20cm程だった苗が、なんとわずか1ヶ月で倍の大きさの40cmにまで生長していました！従来より古代米は生長具合がまちまちで、弥生時代の稲穂の収穫時に穂首刈りが主流だったのは、稲の背丈が不揃いであることが原因の一つと考えられてきましたが、今のところ目立った生長の差は感じられません。

現在の心配は、稲の生長がやや早すぎるように感じられることです。生長が遅いと心配になるし、早ければ早いと心配になるし…。



田植え後1ヶ月の古代米実験水田

さらに2ヶ月経過

燃えるような暑い夏も過ぎ、涼やかな風も吹き始めました。古代米は無事夏を乗り切ったのでしょうか？

8月26日（土）、第3回目の公開授業を開催しました。何はともあれ、まず稲の状態を確認しましょう。稲はさらに驚くような生長を見せており、なんと1mの高さにまで育っています。稲穂もたわわに実り、まさに「頭を垂れる稲穂」のものが多し一方、これから実をつけるものも見られます。ここに来て、古代米に生長具合の差が著しく見られることがはっきりしてきました。周辺に植えられている現在のうるち米と見比べると、古代米がひときわ大きく生長していることが分かります。

周辺の水田と見比べると、古代米実験水田の稲穂だけが赤みがかっています。稲穂を観察してみると、初一粒一粒の先端から、赤く長いヒゲのようなもの（芒）がのびていることが分かりました。この芒が長いことも、古代米の大きな特徴のようです。

参加者全員で稲の観察・スケッチを終えた後、いよいよ収穫の準備です。弥生時代には、稲穂の収穫に石や木、貝を使った道具が用いられていたことが判明しています。そこで、今回は木包丁と呼ばれる木製の収穫具をつくることにしました。本来なら、弥生人と同じつくり方をしなくてはならないところですが、参加者の中には小さいお子さんもいるため、出来るだけ簡単につくれるようにカッターナイフや錐を使用しました。これで収穫の準備万端です！



大きく育った古代米



木包丁づくりに挑戦！

実りの秋です

10月7日(土)、秋晴れの下第4回公開授業を開催しました。9月17日に山口県を襲った台風13号の影響で、稲の多くは横倒しになっていましたが、どうにか収穫は出来そうです。

まず、稲を観察し、1株に実ったお米の数を数えてみました。稲は1.1m~1.2m程に生長していました。1株が大体20~28本の稲穂に分かれており、1株に実ったお米の総数は1000~1800粒でした。

次は待ちに待った収穫です。前回参加者全員でつくった木包丁や資料館が用意した石包丁、貝包丁、加工していないアワビの貝殻、金属の刃の付いた摘鎌で穂摘みを体験しました。参加者からは、石包丁や摘鎌よりも木包丁やアワビの貝殻の方が摘み取りやすいという声が聞かれました。

穂摘みを体験した後は、残った稲を鎌で根本から刈り取り、はぜ架けをしました。



見事に実った古代米



木包丁で摘んでみよう…



貝包丁の切れ味は？



みんなではぜ架け！

古代米を食べてみよう！

ついに古代米を食べる日がやって来ました。10月21日(土)、第5回目の公開授業の開催です。

まずは前回刈り取った稲穂からお米を取り出す作業が必要です。箸こぎ(箸を使って稲穂から籾を取り外す作業)で脱穀した後、木製の臼と杵で杵すりし、ザルに移します。ザルを上下に振って軽い籾殻を風で吹き飛ばし玄米を取り出します！と、文章で書くと簡単ですが、実際には参加者10人で500gの玄米を杵すりするのに約2時間もかかりました。根気強い作業の結果、53㎡の水田から約10kgの玄米が収穫できることが判明しました。

そしていよいよ古代食づくりです。事前につくっておいた弥生土器で赤米入りご飯を炊いたほか、ヤマメの塩焼きや猪鍋をつくり、弥生時代の食卓を再現しました。弥生人の気分で実際に食べてみると…おいしい!!!



根気が必要な箸こぎ…



臼と杵で粉すり



うまく炊けるかな？



古代食のできあがり！

実験を終えて

実現不可能と思われた古代米実験も、参加者の皆さんをはじめ多くの方のご協力により、無事に終了することが出来ました。まことに有り難うございました。

春から秋にかけての大実験でしたが、最後にはおいしい赤米を食べることができました。

しかし、実験の終了は新たな実験の始まりでもあります。今回の実験で得られた成果を考察し、多くの疑問点や課題を解決して行かなくてはなりません。弥生人への道はまだまだ続く…。

たいへんよくできました！



実験を終えてみんなニコリ！

出品目録

番号	品名	時期	遺跡名	所蔵機関
1	弥生土器 壺	弥生時代中期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
2	弥生土器 壺	弥生時代中期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
3	弥生土器 壺	弥生時代中期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
4	弥生土器 壺	弥生時代中期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
5	弥生土器 甕	弥生時代中期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
6	弥生土器 甕	弥生時代後期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
7	弥生土器 壺	弥生時代中期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
8	弥生土器 壺	弥生時代後期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
9	弥生土器 壺	弥生時代後期	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
10	石包丁	弥生時代	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
11	石鎌	弥生時代	吉田遺跡	山口大学埋蔵文化財資料館
12	木製容器 脚付皿	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
13	木製容器 鉢	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
14	木製容器 高杯	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
15	木製 初子	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
16	木製農具 鋤	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
17	木製農具 槌	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
18	弥生土器 甕	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
19	弥生土器 壺	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
20	弥生土器 鉢	弥生時代中期	宮ヶ久保遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
21	弥生土器 甕	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
22	弥生土器 壺	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
23	弥生土器 壺 (初圧痕)	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
24	石包丁	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
25	石包丁	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
26	炭化穀物 米	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
27	炭化物 クリ	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
28	炭化穀物 大豆	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
29	炭化穀物 小豆	弥生時代中期	下村遺跡	(財) 山口県埋蔵文化財センター
30	弥生土器 壺	弥生時代中期	北迫遺跡	宇部市教育委員会
31	弥生土器 壺	弥生時代中期	北迫遺跡	宇部市教育委員会
32	弥生土器 壺	弥生時代中期	北迫遺跡	宇部市教育委員会
33	弥生土器 甕	弥生時代中期	北迫遺跡	宇部市教育委員会
34	石包丁	弥生時代中期	北迫遺跡	宇部市教育委員会
35	ハイガイ・ハマグリ・サボウガイ カミガイ・アカシツメガイ	弥生時代中期	北迫遺跡	宇部市教育委員会
42	ニ付・カサ			
43	木製農具 竪杵	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
44	木製農具 鋤	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
45	木製農具 鋤	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
46	木製農具 臼	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
47	弥生土器 壺	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
48	弥生土器 壺蓋	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
49	弥生土器 甕	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
50	弥生土器 甕蓋	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
51	弥生土器 鉢	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
52	石包丁	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
53	石包丁	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
54	イノシシ 下顎骨	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
55	シカ 角	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会
56	シカ 下顎骨	弥生時代前期	東奈良遺跡	茨木市教育委員会

※4月後半より展示



展示協力 (50音順・敬称略)

(展示協力)

茨木市教育委員会・宇部市教育委員会・財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センター・有限会社テアトロエ芸

(撮影協力)

犬飼佳孝・竹内奈央・村田裕一

山口大学埋蔵文化財資料館
創立30周年記念特別展図録

『稲作到来～弥生人つくった とった たべた～』 ● 編集・発行

山口大学埋蔵文化財資料館
〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
Tel/Fax 083-933-5035
E-mail yuam@yamaguchi-u.ac.jp